

# 古フランス語におけるCVS語順の平叙文の 名詞主語と人称代名詞主語について(Ⅱ)

— 13世紀散文作品 *La Mort le roi Artu* を資料体として — \*

Sur le nom sujet et le pronom personnel sujet exprimé

dans la phrase énonciative d'ordre CVS en ancien français (Ⅱ)

— à partir d'un document en prose du XIII<sup>e</sup> siècle: *La Mort le roi Artu* —

今田 良信

IMADA Yoshinobu

## 0. 目的

古フランス語では、何らかの理由で主語が動詞の後に来て、しかも人称代名詞である場合は、その頻度の表し方は研究者により様々であるが、かなり高い割合で省略される旨の記述が一般的になされている。しかし、実際に古フランス語のテキストに当たってみると、省略されていない事例も散見される。本稿では、方法論も含めてこの問題を検討し、13世紀の散文作品から網羅的に収集した事例を資料として、具体的にはCVS語順の平叙文において「動詞の後」と「人称代名詞である時」という2つの条件を充たしていながら省略されていない(人称代名詞)主語と「動詞の後」の名詞主語との比率がどうなっているのかを調べ、文法書の記述とテキスト上の実際の分布状況との差を検討してみたい。

## 1. 動詞への主語代名詞付加について

先ず、動詞への主語代名詞付加について、Vidos(1959: 396)には共時的観点から次のような指摘がなされている。

“Per quanto riguarda la coniugazione, cfr. it. *canto, canti, canta, cantiamo, cantate, cantano*, sp. *canto, cantas, canta, cantamos, cantais, cantan*, nei quali tutte le persone, singolari e plurali, si possono distinguere chiaramente, con il fr. *je chante, tu chantes, il chante, nous chantons, vous chantez, ils chantent*, in cui le quattro forme omofone si possono distinguere solamente per mezzo dei pronomi in funzione di prefissi. Che i pronomi personali nella coniugazione francese siano diventati dei prefissi e abbiano perduto la essenza di pronomi, appare chiaramente dal fr. *moi, je chante* (cfr. al contrario it. *io canto*, sp. *yo canto*)”

また、Wartburg(1962: 65)には、通時的観点から

“Wenn man nun die Geschichte befragt, so stellt man fest, daß das Altfranzösische die Personen durch Endungen zum Ausdruck bringt, gleich wie das Lateinische und die andern romanischen Sprachen. Erst in einer spätern Epoche werden die Pronomen wirklich obligatorisch.” 「いま歴史を調べてみると、古仏語はラテン語や他のロマン語と同じく、人称の区別は語尾でしていたことがわかる。代名詞が本当に強制化されたのは後の時代のことである。」(島岡茂訳: 61)

と述べられている。そして、この主語代名詞を付加するようになった原因については、大別して2つの意見が見られる。

1つは、Foulet(1935)のように、この変化を、動詞の人称を音声的に同一化した語末の母音・子音の消失に求めている意見である(cf. Wartburg(idem))。もう1つは、Wartburg(1962: 72)のように、語尾音の消失がこの変化の原因であり出発点であるとする通説には根拠がないとし、「12世紀以来、話す言語にはリズム上の規則があり、そこから多く、と言うより大部分の場合、代名詞が動詞に付けられたのが真相である」(同訳書: 70)とする意見である。なお、Wartburgは自らの論拠を支えるものとしてThurneysen(1892)を支持している。また、Wartburg以前にはFranzén(1939)もFouletに反対している。

さらに、主語代名詞付加の定着の時期については、Wartburg(1971: 130-131)が

“Le vieux français avait distingué facilement les formes *chant*, *chantes*, *chantet*, *chantent*. Assez souvent, il est vrai, il les avait fait précéder du pronom sujet, qui, en afr., était toujours accentué. Le vieux français avait refusé de faire commencer une phrase par un mot atone ou de peu de poids et il avait réservé au verbe la 2<sup>e</sup> place dans la phrase. Au besoin il avait fait appel au pronom: (...) Quand, vers 1400, les consonnes et les voyelles finales tombent et que les quatre formes citées plus haut deviennent identiques dans la prononciation, l'emploi du pronom sujet devient général.”

と述べ、主語代名詞付加の起こり(原因)と定着の問題をはっきり分けている。しかし、本稿では、この原因についての議論にはこれ以上立ち入らないことにする。

## 2. 問題の所在

冒頭でも述べたように、古フランス語では、主語が動詞の後に来る場合、その主語が人称代名詞であれば、かなり高い頻度で省略される旨の記述が一般的になされている。

例えば、Raynaud de Lage(1975: 149)は、

“le sujet qui serait placé après le verbe est très fréquemment négligé, et on ne l’exprime pas (surtout quand ce serait un pronom personnel, surtout dans les principales, et même dans les propositions interrogatives)”

と述べている。また, Ménard(1976: 52-53) は,

“La présence en tête de phrase d’un complément direct ou indirect, d’un complément circonstanciel, d’un adverbe entraîne «l’inversion du sujet». Lorsque le sujet est un pronom personnel, il est omis.

*Bien fu armez Guillelmes. (Prise d’Orange, 987)*

= Guillaume était bien armé (inversion du sujet)

*Aprés mengier se departirent. (Perceval, 1923)*

= Ils se séparèrent après le repas(omission du sujet *il*).

としている。興味深いのは, Ménard(1988) [1976年版の改訂増補版] では, 同じ箇所(52-53)の説明が,

“… Lorsque le sujet est un pronom personnel, il est souvent omis.” [下線部筆者]

と訂正されている点である。1語の挿入がもたらす2つの記述の意味するところの違いはかなり大きい。前者では100%省略されることになるのに対し, 後者では省略される程度はかなり下がることになり, しかも, 受け取り方により, その程度に上下の幅が出てくることにもなって, 全体として漠然としたものになる。そして, まさにこの点が, この後筆者が疑問に思っている問題と密接に関わってくるのである。

この頻度の表現は, 研究者によりいろいろ異なる。上述以外では他に, Buridant(2000: 746): “le plus souvent”, Foulet(1980: 313(§457)): “très souvent”, “facilement”, Hasenohr & Raynaud de Lage(1993: 234): “fréquemment”, Joly(1998: 290): “dans la plupart des cas”, Moignet(1979: 357): “très fréquemment”などが見られる。

いずれにせよ, これらの説明に従えば, 主語と動詞が倒置される場合, 動詞の後の人称代名詞の主語は, 上は100%から下はかなりの幅をもって省略されることになる。しかし, 筆者が実際に古フランス語のテキストに当たってみると, 省略される場合があることはわかるが, 省略されていない事例もかなり散見される。

Q.G.[32/19] <sup>1)</sup> Ce vos dirai je bien.

Q.G.[45/22] Et ainsi fus tu deceuz par entendement;

M.A.[14/24] <sup>2)</sup> car autrement seroit il desloiax,

M.A.[36/85] car adonques serions nos a repos,

Q.G. [187/19] Et ce rescousistes vos;

M.A. [87/6] ; por ceste chose ne tornerent il onques vers lui,

また、テキストにより省略の状況に差があることも、漠然とではあるが、感じられた。Bonnard & Régnier(1989: 46-47)には、Moignet による指摘として、次のような個別の作品ごとの具体的な記述も見られた。

“Selon les dénombrements de G. Moignet(1965, p.93), sur 500 vers de la *chanson de Roland* (2200-2704), le pronom sujet manque dans près de 98% des cas où la place 1 est occupée par un complément; chez Villehardouin, aucun emploi du pronom sujet n’a été relevé en pareil cas dans les paragraphes 252-299; mais le pronom est présent dans 35% des cas chez Robert de Clari(d’une langue plus populaire) à la même époque(1200), et une fois sur deux dans la *Mort Artu* qu’on date de 1230.”

この指摘から考えられることは、テキストのジャンル、韻文散文の別、文体、言語レベル等により、省略の状況が異なるのではないかということである。また、作品の成立時期も関係しているであろう。ただこの指摘で問題なのは、用例の収集状況にばらつきが見られることであり、網羅的でないものが含まれている点である。筆者には、省略される事例と省略されない事例の比率が具体的にどうなっているのかという疑問と同時に、それをできるだけ明示的で実証的に調べるにはどうしたら良いのかという疑問が湧いた。

そこで、この現象を扱うに当たっての問題点の考え方、方法論、および資料について、もう少し詳しく述べておきたい。

### 3. 問題点の考え方および方法

この問題の根底には、省略され消えている主語に対して、そもそもなぜそれが(a)「動詞の後」にあり、しかも(b)「人称代名詞である時」と言い得るのか、という根本的な疑問がある。多くの文法書で従来から言われている、省略されるか否かを分けるこの基準に対する反証について説明しておく必要がある。

(b)「人称代名詞である時」という条件については(もちろん「動詞の後」でという条件下でもあるが)、上述のQ.G.やM.A.事例を見れば、必ずしも省略されるとは限らないということが明白であろう。

次に、(a)「動詞の後」という条件に関して、それを反証するものとしては、語であれ、句であれ、節であれ、文頭に立った全く同一のCに対して、①後続にV S / S V 両語順が現れる(すなわち、語順にゆれが見られる)事例や、②S V 語順のみが現れる事例を挙げ

ることができる。こういうCの場合、主語が省略されていても、①については、それが動詞の後にあったとは必ずしも言えないし、②については、決して言えないと考えられるからである。例えば、①について次の例を見られたい。

(1) *M.A.* [16/63] *Meintenant se part Lancelos de leanz ...*

(2) *M.A.* [93/27] *et maintenant messire Gauvains se part de court et ...*

同じ*meintenant*が文頭に立ちながら、主語が、(1)では動詞の後に、(2)では動詞の前に来ている。このようなCが文頭に来る時には、主語が省略されていても、その位置は動詞の後であるとばかりは言えないはずである。また、次のような事例もある。

(3) *M.A.* [10/1] *L'endemain, quant il fu jorz, vindrent a un chastel ou li rois avoit jeu la nuit, ...*

この例において、動詞*vindrent*の主語 (*Lancelos et ses escuiers*ないし*il(pl.)*と考えられる)が省略されているのは、動詞の後であろうか、前であろうか。筆者は、動詞の後であるとは断言できないと考える。なぜなら、同様の環境に置かれた次のような実例があるからである。

(4) *M.A.* [89/14] *A l'endemain, quant li jorz parut, dist messire Gauvains a Lancelot: ...*

(5) *M.A.* [89/1] *Au soir, quant il fu tens de couchier, Lancelos se parti de leanz a grant compaignie de chevaliers;*

これらの事例を見る限り、例(3)と同様の統語環境にありながら、主語が、(4)では動詞の後に、(5)では動詞の前に来ており、動詞の後でも前でも現れる可能性があることを示している。従って、例(3)の主語は、必ずしも動詞の後で省略されているとは言えないのではないかということである。従って、(a), (b)2つの条件を満たしても、主語が100%省略されるというわけではないことは、実例が示す通り確かである。前述のように、Ménard(1988)が、*souvent* という語を挿入したのも、その点に気づいたからではないかと思われる。

(6) *M.A.* [41/83] *Quant la nuiz fu venue, messire Gauvains s'en vint a l'ostel le roi de Norgales;*

(7) *Q.G.* [51/12] *Et quant il est armez, il se part dou chastel,*

さらに、②についても、例(6), (7)に見られるように、*quant*~のような状況補語節(従属節)が、単独で文頭に来る複文の場合、筆者の知る限り、主語が名詞であれ人称代名詞であれ、主節はSV語順しか取らない。この場合でも主節の主語が省略されることは少なくないが、現れる時には動詞の前の位置にしか現れない主語が、省略されたからといって、その時だけどうして動詞の後であると言えるのであろうか。

この件について、村上(1977: 58)によれば、本稿で扱う問題とは異なるが、一般的に次のような指摘がなされている。

「S. [=主語] が省略されている場合、— これは古仏語には非常に多い — それがどの位置に省略されているかは永久にわからない問題であり、この種の例文は統計上省かざるを得ないであろう。」

この見解は、傾聴に値する至極妥当なものであると筆者は考える。

また、Moignet(1965) は、Cが文頭に立つ(すなわち、CVおよびCVS語順の)全ての事例を対象にしているようであるが、上記のように、CVの事例についてはSが本当に「動詞の後」にあると言い得るか怪しいものが少なからず含まれることになるし、「人称代名詞である時」という条件については、どの例についてもそれを証明できる決定的な決め手は無いように思われる。

以上の理由から、筆者は、Moignet(1965)とは視点を変え、この点が従来のアプローチとは異なるのであるが、明示的に「動詞の後」と「人称代名詞である時」という2つの条件を両方とも満たしているのに、省略されていない人称代名詞主語が、名詞主語に対してどういう比率になっているのかを調べてみたい。

#### 4. 資料について

拙論(2005)では、韻律や作詩法上の制約を被らない散文の中で、13世紀前半の散文作品である *La Queste del Saint Graal* を資料体とした。今回は、Moignet(1965)の記述との比較も念頭に置いて、同じ時期の別の散文作品 *La Mort le roi Artu* を対象とする。

*La Mort le roi Artu*, Roman du XIII<sup>e</sup> siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève/Paris: Droz/Minard, 1964.

なお、前者の調査の結果についての詳細は拙論(2005)を参照いただきたい。また、上記2作品以外の資料の分析については、今後の課題としたい。

#### 5. 用例収集の結果

上述の資料M.A.から収集した用例全体をまとめたものが〔表1〕である。〔表1〕の見方について説明しておきたい。縦軸の区分は、文頭に来るCを、その位階<sup>3)</sup>と機能<sup>4)</sup>によりタイプ分けしたものである。例えば、C[MOT]<sub>op</sub>VSとは、「語の位階に属する直接目的補語」が文頭に来て、後続語順がVSとなっている事例のタイプ、C[SYN][PROP]<sub>c</sub>VSとは、「句の位階に関係節や同格節などが付属している状況補語」が文頭に来て、後続語順がVSとなっている事例のタイプということになる。横軸の区分は、文頭のCにより倒置され

〔表1〕

位階／機能による 文頭のCのタイプ	省略されていないS			合 計
	名詞(句)	人称代名詞	その他	
C[MOT] <sub>od</sub> VS	4(15.4%)	21(80.8%)	1(3.8%)	26(100%)
C[MOT][PROP] <sub>od</sub> VS	0(0%)	1(100%)	0(0%)	1(100%)
C[MOT] <sub>oi</sub> VS	1(100%)	0(0%)	0(0%)	1(100%)
C[MOT] <sub>c</sub> VS	355(65.7%)	133(24.6%)	52(9.6%)	540(100%)
C[SYN] <sub>od</sub> VS	28(59.6%)	18(38.3%)	1(2.1%)	47(100%)
C[SYN][PROP] <sub>od</sub> VS	0(0%)	1(100%)	0(0%)	1(100%)
C[SYN] <sub>oi</sub> VS	5(41.7%)	4(33.3%)	3(25%)	12(100%)
C[SYN] <sub>c</sub> VS	144(59.3%)	82(33.7%)	17(7.0%)	243(100%)
C[SYN][PROP] <sub>c</sub> VS	12(34.3%)	20(57.1%)	3(8.6%)	35(100%)
C[PROP] <sub>c</sub> VS	10(27.8%)	25(69.4%)	1(2.8%)	36(100%)
合 計	559(59.3%)	305(32.4%)	78(8.3%)	942(100%)

〔表2〕

文頭のCのタイプ	je(ge)	tu	il/ele	nos	vos	il/eles	合計
C[MOT] <sub>od</sub> VS	11	0	3	2	2	3	21
C[MOT][PROP] <sub>od</sub> VS	1	0	0	0	0	0	1
C[MOT] <sub>oi</sub> VS	0	0	0	0	0	0	0
C[MOT] <sub>c</sub> VS	66	6	34	10	8	9	133
C[SYN] <sub>od</sub> VS	13	0	1	0	4	0	18
C[SYN][PROP] <sub>od</sub> VS	0	0	1	0	0	0	1
C[SYN] <sub>oi</sub> VS	0	0	2	0	2	0	4
C[SYN] <sub>c</sub> VS	29	2	27	5	13	6	82
C[SYN][PROP] <sub>c</sub> VS	7	1	7	0	2	3	20
C[PROP] <sub>c</sub> VS	13	0	9	2	1	0	25
合 計	140 (14.9%) [45.9%]	9 (1.0%) [3.0%]	84 (8.9%) [27.4%]	19 (2.0%) [6.2%]	32 (3.4%) [10.5%]	21 (2.2%) [6.9%]	305 (32.4%) [100%]

て「動詞の後」にありながら、省略されていないSを品詞別に区分してある。「その他」には、名詞(句)、人称代名詞以外のものが全て(例えば、不定代名詞、指示代名詞など)が含まれている。さらに、〔表1〕の「人称代名詞」について、それを人称・数について下位区分したものが〔表2〕である。

## 6. 分析と結論

本稿で得られたM.A.の用例収集の結果を、拙論(2005)のQ.G.についての結果と比較しつつ分析してみたい。〔表1〕からは、次の点が指摘できよう。

i) 名詞主語と人称代名詞主語の比率であるが、S、V、Cがすべて明示されているCVS語順の文の用例総数は942例であった。そのうち名詞主語の事例は、Q.G.(50%)より比率の大きい59.3%(559例)である。これに対して、主語が人称代名詞でありながら省略されていない事例は305例で、全体の3割強に当たる32.4%である(Q.G.では40.9%)。この数値を2.で述べたMoignetの指摘(“une fois sur deux dans la *Mort Artu*”)に単純に引き当てるなら、305例はM.A.全体から収集した網羅的な数値なので、Moignetの調査もそうであるとすれば、主語が「人称代名詞であり」省略されているCV(S)語順の事例もM.A.には305例ほどであると「解釈される」ことになるが、3.で述べたように、これを客観的に実証することは難しいのではないかと思われる。

ii) さらに、Cの位階や機能の別による分布に関しては、タイプ別用例合計数が10例未満のものを除くと、

①名詞(句)の主語の割合が最も多かったのは、Q.G.の場合と同じくC[MOT]<sub>c</sub>VSのタイプで、このタイプの用例合計540例中355例を占める65.7%であった。

②人称代名詞主語の割合が最も多かったのは、Q.G.と比べると1位2位が逆で、1位はC[MOT]<sub>oD</sub>VSのタイプであり、Q.G.より実数は少ないが、このタイプの用例合計26例中21例を占める80.8%であった。また、C[PROP]<sub>c</sub>VSのタイプが2番目で、人称代名詞主語の割合はこのタイプの用例合計36例中25例を占める69.4%であった。

③また、表には挙がっていないが、文頭に来る個々のCの別により、主語が名詞主語や人称代名詞主語に偏りがあるという傾向は、Q.G.の場合と同様にM.A.にも見られた。もう少し細かい分析をすれば興味深いと思われるが、今後の課題である。

次に、〔表2〕からは、次の点が指摘できよう。

iii) 人称代名詞の人称・数の分布については、省略されていない人称代名詞主語の用例総数305例中最も多かったのは、1人称単数の140例で全体の45.9%であった。次に多かったのが3人称単数の84例で全体の27.4%であった。これもQ.G.(1位:3人称単数で全体



の37.4%, 2位: 1人称単数で全体の30.0%)とは1位2位が逆ではあるが、この両方で全体の7割程度になる点はQ.G.と同様である。残りは、2人称複数が32例で10.5%, 3人称複数が21例で6.9%, 1人称複数が19例で6.2%, 2人称単数は9例で3.0%と続いている。

以上、S, V, Cがすべて明示されている平叙文のうち、CVS語順の事例を対象として、従来から基準とされてきた「動詞の後」と「人称代名詞である時」という2つの条件を満たしながら、省略されていない人称代名詞主語の名詞主語に対する割合を、数量的に調べてみた。古フランス語の多くの文法書において当然のように類似の頻度表現で、画一的にそうであるかのような印象を与えてきた記述 — 「動詞の後」で「人称代名詞である時」は、主語は「大部分は(非常に頻繁に)」省略される — が、拙論(2005)および本稿を通じて、まだ限られた資料体からではあるが、従来とは異なるアプローチによって、13世紀前半という時期においてもさえも、そのまま鵜呑みにはできないのではないかという証拠は示すことができたと考える。今後さらに資料体の範囲を広げて調べて行きたい。

#### 注

\*) 本稿は、日本ロマンス語学会第44回大会(2006年5月14日、於青山学院大学)における口頭発表をもとに、加筆・修正を施したものである。

1) *La Queste del Saint Graal*, Roman du XIII<sup>e</sup> siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris, Honoré Champion, 1980. の32ページ/19行を示す。以下同様。

2) *La Mort le Roi Artu*, Roman du XIII<sup>e</sup> siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève/Paris, Droz/Minard, 1964. の14節/24行を示す。以下同様。

3) ここでいう位階とは、M. A. K. Halliday などを中心とする体系文法(systematic grammar)の用語のrankの意味である。『現代言語学辞典』(成美堂, 1988)によれば、「文法の諸単位は異なる大きさをもつ形式的項目であるが、その諸単位は大きさという尺度に従って配列される。それぞれの単位は階層(hierarchy)をなす。これら単位間の関係を位階という。」とある。フランス語の基本的な単位を大きい方から順に挙げれば、文(phrase) > 節(proposition) > 句(syntagme) > 語(mot) > 形態素(morphème)となる。

4) 機能とは、具体的には、直接目的補語(C<sub>OD</sub>: complément d'objet direct), 間接目的補語(C<sub>OI</sub>: complément d'objet indirect), 状況補語(C<sub>C</sub>: complément circonstanciel)の3つの機能を指す。

#### 参考文献

- Bonnard, H. & Régnier, C. (1989): *Petite grammaire de l'ancien français*, Paris, Magnard.
- Buridant, C. (2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris, SEDES.
- Foulet, L. (1935): L'extension de la forme oblique du pronom personnel en français, *Romania*, 61, pp.257-315, 401-463; 62, pp.27-91.
- Foulet, L. (1980<sup>3</sup>): *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris, Champion.
- Franzén, T. (1939): *Etude sur la syntaxe des pronoms personnels sujets en ancien français*, Upsala.
- Hasenohr, G. & Raynaud de Lage, G. (1993<sup>2</sup>): *Introduction à l'ancien français*, Paris, SEDES.
- 今田良信(2005): 「古フランス語におけるC V S語順の平叙文の名詞主語と人称代名詞主語について — 13世紀散文作品 *La Queste del Saint Graal*を資料として — 」, 『広島大学フランス文学研究』, 24, pp.372-383.
- Joly, G. (1998): *Précis d'ancien français*, Paris, Armand Colin.
- Ménard, Ph. (1976): *Manuel du français du moyen âge: I. Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, SOBODI.
- Ménard, Ph. (1988<sup>3</sup>): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, Bière.
- Moignet, G. (1965): *Le pronom personnel français: Essai de psycho-systématique historique*, Paris, Klincksieck.
- Moignet, G. (1979<sup>2</sup>): *Grammaire de l'ancien français*, Paris, Klincksieck.
- 村上勝也(1977): 「主格関係代名詞節における古仏語の語順 — S. C. V. 構文の種々相 — 」, 『広島文教女子大学研究紀要』, 12, pp.49-58.
- Raynaud de Lage, G. (1975<sup>9</sup>): *Introduction à l'ancien français*, Paris, SEDES.
- Thurneysen, R. (1892): Die Stellung des Verbuns im Altfranzösischen, *Zeitschrift für romanische Philologie*, 16, pp.289-307.
- Vidos, B. E. (1959): *Manuale di linguistica romanza*, Firenze, Leo S. Olschki.
- Wartburg, W. von(1962<sup>2</sup>): *Einführung in Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft*, Tübingen, Max Niemeyer. [島岡茂訳『言語学の問題と方法』, 紀伊國屋書店, 1973]
- Wartburg, W. von(1971<sup>10</sup>): *Evolution et structure de la langue française*, Berne, Francke. [田島宏・高塚洋太郎・小方厚彦・矢島猷三共訳『フランス語の進化と構造』, 白水社, 1976]